

東京バツ八合唱団 月報

[第530号] 2006年8月号 Web版

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel: 03-3290-5731 Fax: 03-3290-5732
E-mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.530

August 2006

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

《さとうきび畑》の歌から

大村 恵美子

昨 2005 年は、戦後 60 年というので、多くの関連行事が日本中で展開され、ゆかりのコンサートなども多く催されました。

例の有名な「ざわわ」の歌《さとうきび畑》を作詞・作曲した寺島尚彦氏は、その前年 2004 年 3 月に亡くなりましたが、次女の夕紗子さん（優秀なソプラノ歌手）らによって、2005 年 6 月に、糸満市摩文仁の沖縄平和祈念堂で、「さとうきび畑こんさあと - 追悼・寺島尚彦作品の夕べ」が開かれました。

寺島氏は、私と同じ作曲の師・池内友次郎先生門下で、同学年に芸大で学んだ人です。しかし私は、うかつにも、この「ざわわ」の歌がこれほどにも有名であったとは、ごく数年前に知ったのでした。

新刊の広告をみて、田村洋三著『ざわわざわわの沖縄戦 - サトウキビ畑の慟哭』（光人社。著者は、読売新聞大阪本社社の重職を歴任され、現在ノンフィクション作家。1931 年大阪生まれ。）という本を読みました。

この書の中で知った、寺島さんと沖縄との関係は：

1964 年 6 月、アメリカ統治下の沖縄を演奏旅行ではじめて訪れ、さまざまな戦跡を案内してもらった。

訪れたどの場所も、そこがかつての戦場か、と見まがう静かなたたずまいを見せていた。その末に日本軍と多くの県民の終焉の地である南部島尻・摩文仁の激戦地を覆っている一面のサトウキビ畑に踏み込んだ。…（案内の男性が）寺島に語り掛けた。

「あなたが今、歩いているこの土の下に、まだ多くの戦没者が眠ったままになっているのですよ」

寺島は言う。

「その瞬間、クラクラッとして、物凄い風の音が戦争で亡くなった人達が号泣しているような、嗚咽しているような、あるいは魂の怒号...を耳元で聞いたような気がしました」(p.14)

そして、なんとかこの思いを歌に、とせき立てられる。

「淡々と歌っていくうちに、内面から悲しみが滲み出てくるような歌でありたかった」(p.15)

沖縄訪問からほぼ 3 年を経た 1967 年の春、この《さとうきび畑》の歌はついに完成します。その後、日本の各地で心ある人々に歌い継がれて、現在でも 10 種の CD が市販されるロング・ミリオンセラーになっているとのこと。

ところが一面、「寺島さんは、あの歌が沖縄の人たちにどう受けとられるか、を一番気にしておられたようですが、寺島さんの話では歌を発表してから何と 24 年間、沖縄からの反響は葉書一通、電話一本もなかったそうです」という平和ガイドの方の談話も伝えられているのです。(p.18)

ここが、深刻なところなのですが、ある大きな出来事（戦争体験のような）を、あとからどんなに追体験しようとし、真摯に共鳴させようとしても、どうしても不可能になる。現に、当事者だった沖縄の方々が、どんなに努力しても自分はまだ事の真相を伝えていない、との自責の念で 60 年間過ごしている、というのです。(p.22)

沖縄の人たちの声がいづつか引用されていますが、本当に無理もないと思われず。「沖縄戦末期の本島南部の激戦地には、もうまともなサトウキビ畑なんかありませんでした。県民や日本軍を追って南下した米軍は、敗残兵の掃討や兵糧攻めをねらってキビ畑を焼き払い、畑は見る見るなくなりしました。そこへ海からの艦砲（射撃）陸からの砲撃、空からの空襲が追い討ちをかけ、地形さえ変わりました。ざわわ、ざわわと風にそよぐほどキビがあったら、沖縄の人たちはもっと助かりました。誤解を招く歌です」。（ひめゆり学徒隊の生還者の発言。p.24）

10 年以上も、この歌を修学旅行生のバスの中で歌いつづけていた前出の平和ガイドの方も、数年前からあまり歌わなくなった。「ガイドの内容を高めようと沖縄戦を勉強するうち、戦争は人間が起こすもの、沖縄戦の惨禍も一つかみの人間によって引き起こされたことを認識しました。それなのに歌は『海の向こうからいくさがやってきた』と第 3 者的で、戦争をまるで自然災害のように捉えています」(p.24)

私はまだ、一度も沖縄を訪れてはいません。何度か行ってデモの輪に加わろうと思ひ、とくにジュゴンのいる海に基地を移そうとするのには、今度こそ行こうかと決心しかけたほどでしたが、沖縄の人たちに対して合わせる顔がない、という思いですと縛られてきたのです。沖縄の経済

のためには、無心に、海がきれいだから、と泳ぎに出かける子どもたちのほうがよっぽどありがたいでしょう。でも、私は観光地沖縄も、基地の町沖縄も、どうしても見たくないのです。60年も、そのうち、そのうちと言いながら、私たちは何もせず、欺きつづけてきたのです。

沖縄にいくら心情的な共感や同情を抱いても、かれらの現実はずっと変わらないどころか、もっともっと固定化されようとしています。

この本の著者も、「ざわわ」の歌を愛していて、「様々な評があるにもせよ、40年近くも歌い継がれていることが示すように優れた歌曲である」(p.247)と述べています。それだけに、歌う内地人が、なんの理解もなしに、ただ感傷に浸ることのないよう、この本で、サトウキビとは、沖縄の人にとってどんなに大切なものだったのか、ということ、を、広い各方面から冷静に説き、また幸福の島だった王朝期の沖縄から、島津藩の琉球処分をへて、明治維新、太平洋戦争へと、一貫して沖縄を踏みつけにしてきた日本の歴史を示し、沖縄戦の凄まじさを、何人もの生き残りの証人の言によって私たちに教えているのです。

「沖縄では、琉球征討を仕掛けた薩摩(鹿児島)の人々を筆頭にヤマトンチュウ(本土人)に対する目は冷めている。王朝時代からの度重なる迫害と差別の歴史、拳銃の果てに本土決戦の捨て石にされ、戦後60年を超えてなお米軍基地の大半を押し付けられては、それも無理のないことであろう。」(p.246)

「沖縄で悪名高い薩摩藩は、明治維新で長州藩と共に華々しい主役を演じるが、その資金源がサトウキビ生産農民から搾取した黒糖だった、という事実は余り知られていない。」(p.59)

「こうして諸事一新、万民平等の明治維新政府はスタートしたが、“陰の功労者”沖縄は相変わらず属国のような差別を受け、本土の他府県並みには扱ってもらえなかった。」(p.61)

今の日本人は、どうなのか。同じではないのでしょうか。今後の沖縄を、どうなればよいと考えるのでしょうか。

この本の主題であるサトウキビの場合は、「2004~05年産の収量は再三に及ぶ台風の襲来、早魃などの影響もあって、復帰後最低の679,000トンだった。ピーク時の1990年に1,780,000トンもあったことを思えば、キビ農業の衰退ぶりがうかがえて寂しい。」(p.248)

私は、かねがね、いろいろな説を調べながら、沖縄は日本から独立することで展望が開ける、という考えにまとまっています。日本政府は、日米同盟を口実にして、沖縄のことを自主的に何も考えていない。基地を減らすことだけでなく、みんなサボタージュでごまかしています。アメリカが沖縄のことを重んじて、世界をにらんだ軍事基地に最適と言うのなら、それにもまして、経済特区としてアジアのハブ都市となり、学术交流のセンターとなり、非核平和都市のモデルとなるにも、まったく最適なロケーション

ンにあると、私は思います。苛酷な歴史に耐えてきたにもかかわらず、住人たちはみな明るく友好的で、きっと大喜びでそのような将来の国づくりに励むことでしょう。私たちは、そのときこそ足しげく沖縄に通い、できる範囲のあらゆることを、心から捧げつくすのです。それでこそ、長年にわたるわれわれの罪滅ぼしが、裏表のない気持ちで可能となるのではないのでしょうか。もう、おためごかしの同情はひっこめて、実のある建設的な協力の汗を流しましょう。沖縄のみなさん、待っていてください、そんな気にさせてくれた、貴重な本でした。

【参考】(本年)5月21日、沖縄を訪れていた米グアム準州のカレオ・S・モイラン副知事は、再編の最終報告で示された在沖米海兵隊(8000人)以外の受け入れ可能性について、「インフラが整備されれば、それ以上の許容があるのは事実だ」と述べ、今回の再編にともなうインフラの充実で、さらなる在沖米軍の誘致が可能になるとの考えを示した。(『世界』2006年8月号 p.225)

《マタイ》の集中練習 始まる

8月5日の土曜日から、集中練習が始まりました。

東京の最高気温が35度を越したこの日、桜新町の世田谷中央教会2階の礼拝堂は、冷房装置のフル回転で、快適な真夏の特訓場と化しました(午後1時~7時、6時間)。

《マタイ受難曲》での合唱の出番は、大合唱曲、弟子や群衆の合唱、コラールなど大小全40曲ありますが、この日の練習では、後半20曲(Nr.38bからNr.67まで。終曲をのぞく)の総ざらいを行いました。

夕方からは、アルトの佐々木まり子先生が、飛び入りで応援に駆けつけてくださり、冒頭大合唱の両コーラスの掛け合いなどを中心に、念入りなご指導を受けるというボーナスまでありました。まり子先生は、8月26日の練習でもご指導くださるそうです。

練習参加者はS17名(欠5名)、A24(欠8)、T6(欠2)、B12(5)の合計59名(欠20名、いずれも当日現在団員数)、うち2名は初参加の方。他に2名の見学者がいらっしゃいました。ちなみに、初参加のS秋山さんは秋田市にお住まいで、朝6時に家を出られ、練習の終了時間を待たずにトンボ帰りの強行軍でした!!

写真：松尾茂春



《マタイ》児童合唱、8月26日に発足

- 児童団員募集 -

《マタイ受難曲》では、第1部の初めと終わり(Nr.1とNr.29)に、第1、第2コーラスとは別に、コラール定旋律を歌う一群が登場します。

私たちの本番では、小学生以上の少年少女の合唱団を予定していますが、いよいよ今月の最終土曜日(8月26日)に桜新町の練習場(世田谷中央教会)で発足し、初顔合わせと初練習があります。

この日は、大人のコーラスも集中練習の佳境に入っているはずで、おおきよき子羊のコーラールも加わることになるのでしょうか。待ち遠しいです。

30名ほどのメンバーを予定していますが、現在の登録者は15名ほどだそうで、まだ余裕があります。月報読者のみなさまのご家庭で、あるいはご近所で、歌の好きなお子さんを見かけた方は、ぜひ、この発足の日(午後2時30分開始)におつれください。(事務局へご一報いただければ、ご案内パンフをお送りします)

<児童合唱団>

- 原則として小学生以上
- 合唱経験の有無を問いません
- 費用：参加費として3000円のみ(楽譜は差し上げます)

練習会場：世田谷中央教会(東急田園都市線「桜新町」駅下車4分、サザエさん通り。世田谷区桜新町1-14-22、電話03-3428-2388教会)

練習日・時間：第1回8月26日(土) 第2回9月2日(土) いずれも午後2時30分から3時15分。以降、毎月第1、第3土曜日の同時刻。

(その他の詳細は、案内パンフ参照)

本番：2007年3月21日午後5時開演、杉並公会堂。

8月の練習スケジュール(再出・内容欄の()内は曲番号)

・毎土曜日：集中練習 ・月曜日(目白)：全休

日	曜	時間	会場	内容
5	土	<終了>	世田谷	<終了>
12	土	13:00 - 16:00 16:30 - 19:00	世田谷	橋本先生(29,68) 大村先生(29,68)
19	土	13:00 - 16:00 16:30 - 19:00	世田谷	大村先生(3 - 37)
26	土	13:00 - 14:30 14:30 - 15:15 15:45 - 19:00	世田谷	大村先生(27b) +内山先生(1,29) 児童 橋本先生(38b - 67)

9月2日(土) 4日(月)からは通常日程

この時期からの新たな参加者も交え、ふたたび《マタイ》冒頭から、曲の順を追っての練習が始まります。

新入団員(7月)

<ソプラノ>

小久保基子さん(元団員)

<アルト>

松本道子さん(元団員)

<テノール>

蛭子克郎さん(演奏会チラシを見て)

<バス>

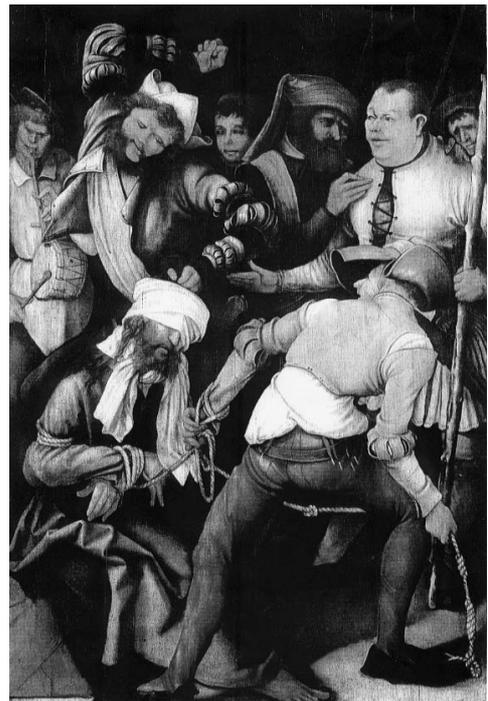
鈴木 靖さん(元団員)

受難曲と美術作品

白木 博也(画家・後援会員)

キリストへの嘲笑

捕縛されたキリストが、群衆によりあらゆる嘲笑と虐待を受けている様子を如実に描いている。



マティアス・グリューネヴァルト(1470/75~1528)
ミュンヘン、アルテ・ピナコテーク

《マタイ受難曲》の関連テキスト

36c. 福音史家

かれら み顔に 唾(つばき)し、こぶしにて 打つ。ある者ら
手のひらにて 打ち 言えり： (マタイ 26 : 67)

36d. 合唱(・)

「当てよ 当ててみよ キリスト

なれを 打つは たれか？」 (マタイ 26 : 68)

「日本語演奏による

バッハ・カンタータ 50 曲選」 CD 最終回発行のお知らせ

CD「バッハ 50 曲選」の最終回第 5 期発行は予定を早め、この秋には、みなさまにお届けできる運びとなりました。

2000 年の楽譜シリーズ「バッハ・カンタータ 50 曲選」(全 50 巻)の刊行開始を追って、2003 年より日本語演奏 CD シリーズ(全 20 巻)の制作をつづけてきましたが、昨年末までに収録予定全曲の演奏と録音を終了し、現在、最終回全 4 巻(11 曲収録)の編集制作にかかっています。

楽譜全 50 巻の完結以来、全国紙などにとり上げられる機会が多くなり(日経 05 年 12 月 8 日夕刊、読売 06 年 4 月 20 日、朝日 06 年 5 月 6 日夕刊など) <バッハを日本語で演奏すること>への理解が、多少は浸透してきたのではないかと思います。このたびの CD 完結により、さらに多くの方々が、この一連の企画に興味をもってくだされば、と願っています。

近日中に、詳細のご案内とともにご購入の予約申込みをお願いする予定です。ご協力をいただければ幸いです。

最終回の収録内容

収録全 11 曲のうち、7 曲が 2005 年以降の録音であり、

第 97 回定演(05 年 5 月) ... BWV116

第 98 回定演(05 年 12 月) ... BWV123、BWV192、BWV197

第 99 回定演(06 年 5 月) ... BWV180、BWV187、BWV194

多くの団員、後援会員の方々にとっては、演奏者あるいは聴衆として、記憶に新しい曲が多いことでしょう。また、*印の 4 曲は、橋本眞行氏の指揮によるものです。

なお、CD 容量の都合により、収録順と組合せを多少変更させていただきました(下記:当初予定の収録位置 ~~BWV00~~ は、BWV 00 の位置に移動、を示す)。ご了承ください。

第 14 巻 : BWV110, BWV116, BWV123

第 18 巻 : BWV156, BWV180, BWV187

第 19 巻 : ~~BWV187~~, BWV190, ~~BWV192~~, BWV194

第 20 巻 : ~~BWV194~~, BWV192, BWV196, BWV197

[第 14 巻]

BWV110《よろこび 笑い あふれ》 キリスト降誕の喜びを朗らかな笑いの合唱で表現。1997 年録音。

BWV116《平和の君 イェス》 今ふたたび戦乱の巷と化すパレスティナに贈りたい。多彩な管楽器が魅力。2005 年録音。

BWV123《いとしインマヌエル わが魂の救い主よ》 幼児の顕現を讃える名曲。2005 年録音、橋本指揮。

[第 18 巻]

BWV156《墓に片足いれ》 死の床にある者への慰め。魅力的なオーボエソロの旋律は忘れがたい。2000 年録音。

BWV180《装え心よ 罪の闇を去り》 ソロ声部が舞曲リズムのアリアを競う。「讃美歌 21」75。2006 年録音、橋本指揮。

BWV187《待ちのぞむ みな なれを》 堂々たる作風の“大地の糧のカンタータ”。2006 年録音、橋本指揮。

[第 19 巻]

BWV190《主にむかいて歌え 新たなる歌を》 古旋律を織り込みつつ、詩編聖句をもって新年をことほぐ。1997 年録音。

BWV194《大いなるこの日 新たな宮を》 献堂式用とされる演奏時間 44 分の力作、祝祭気分が充溢。2006 年録音。

[第 20 巻]

BWV192《ああ感謝せん 神に》 教会の諸行事に演奏されることを望む。「讃美歌 21」11 参照。2005 年録音、橋本指揮。

BWV196《主は覚えたもう われらを》 23 歳のバッハの手になる素朴な結婚カンタータ。歌詞は詩編 115。1993 年録音。

BWV197《主 かたき望み》 50 代のバッハの大規模・典雅な結婚カンタータ。終曲は「讃美歌 21」454。2005 年録音。

既発行の各 CD は在庫があります。

以前にもご案内しましたが、同一 CD 2 枚目からのご購入は半額でお頒けしております。ご紹介・宣伝等に、ご活用ください。お申し込みは、パンフレット請求とも、事務局へ。

単体 2300 円 1150 円、4 巻セット 8600 円 4300 円